

児童によるFM活動を通した学習計画の立案が 学習動機づけに及ぼす影響（2） —児童の動機づけスタイルの相違に着目して—

○中村美祐希（横浜国立大学大学院）
佐久間賢志#（朝日塾小学校）
高本真寛（横浜国立大学）

川中紫音（横浜国立大学大学院）
吉井 毅#（江戸川学園取手小学校）

キーワード：フューチャーマッピング，学習動機づけ，セルフ・コントロール

問題と目的

フューチャーマッピング（以下，FM）とは，「未来のあるべき姿から今を考える」や「未来の目標に向けたシナリオを作る」ことを目的とした，山あり谷ありの「幸福度曲線」を描き，実際の行動計画の立案を行う活動である。児童にこの活動を実践することが，児童自身の学習行動の変容に影響を及ぼすことも十分に考えられる。そこで，本研究では児童の学習への動機づけスタイルの違いによってFM活動の実践効果が異なるか否かについて検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

茨城県のA小学校および岡山県B小学校に在学する小学生で，FM活動と2回の調査に回答した136名（A小学校3クラス：73名，男性36名，女性36名，不明1名；T小学校3クラス：63名，男性39名，女性24名）を分析対象とした。FM活動を実施したクラス数は，A小学校とT小学校でそれぞれ1クラスと2クラスであった。調査の実施に先立ち，学校長の許諾を得た。

調査票の構成

1. 児童の学習への動機づけを測定するために，西村他（2011）の「自律的学習動機づけ尺度」を使用した（4件法）。

2. 児童のセルフ・コントロールを測定するために，庄司（1993）の「児童のself-control尺度」を使用した（4件法）。

結果と考察

まず，児童の学習への動機づけスタイルを分類した。具体的には，FM活動実施前における児童の学習への動機づけ得点を下位尺度ごとに標準化し，標準化得点を用いてWord法によるクラスタ分析を行った。分析の結果，特徴のある4クラスタが得られた。各クラスタの特徴とクラスタ名は以下の通りである。第1クラスタ（ $n=38$ ）は自律的な調整スタイル（内的調整，同一化的調整）の得点が高く，統制的な調整スタイル（取り入りの調整，外的調整）の得点が低いことから「自律的動機づけ高群」とした。第2クラスタ（ $n=53$ ）は，第1クラスタと同じく，自律的な調整スタイルが高い傾向が見られたが，統制的な調整スタイル得点が平均程度見られたため「自律的動機づけ低群」とした。第3クラスタ（ $n=29$ ）は外的調整得点が高

いため「統制的動機づけ群」とし，第4クラスタ（ $n=4$ ）は外的調整が高くその他の動機づけ得点が最も低いため「外的動機づけ群」とした。

続いて，児童の動機づけスタイルによってFM活動の実践効果が異なるかを検討した。実践の有無と動機づけスタイルを要因とし，学習動機づけおよびセルフ・コントロールの変化量得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。ただし，未実施群で外的動機づけ群に該当する児童が1名のみであったため，今回の分析ではこの動機づけ群を除いた3群を対象とした。その結果，セルフ・コントロールにおいて有意傾向の交互作用が見られた（ $F(2, 102) = 2.35, p < .10$ ）。

最後に，児童が描いたFMに関する分析を実施した。具体的には，児童が描いたFMの中に（1）具体的な学習計画（以下，action planとする），（2）物語におけるポジティブ（うれしい，楽しいなど）な出来事や気持ち（以下，ポジティブな観点とする），（3）物語におけるネガティブ（悲しい，悔しいなど）な出来事や気持ち（以下，ネガティブな観点とする），といった3点が書かれているかを数量化した。その後，動機づけスタイルによって記述数が異なるかを検討した結果，action planにおいては動機づけスタイルの相違による記述数に統計的有意差は見られなかった。一方，残りの2つの観点では，統制的動機づけ群が自律的動機づけ高群よりもポジティブな観点の記述数が多く，外的動機づけ群が自律的動機づけ低群よりもネガティブな観点の記述数が多かった（Table 1）。

Table 1 動機づけスタイルによる記述数の相違

	action plan		ポジティブな観点		ネガティブな観点	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
自律的動機づけ高群	0.24	0.77	2.81 ^b	1.29	1.81	1.12
自律的動機づけ低群	0.86	1.28	3.05	1.68	1.36 ^b	1.05
統制的動機づけ群	0.18	0.39	4.18 ^a	1.43	2.12	1.11
外的動機づけ群	0.00	0.00	2.00	1.73	3.33 ^a	2.31

付 記

本研究の実施に際し，アルマ・クリエイション株式会社に協力いただいた。